鶴山書院報

第3号
公益財団法人
孔子の里
〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原庠舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com
発行人
理事長 横尾俊彦

西郷（せごう）どんと多久聖廟

～「敬天愛人」と「敬は一心の主宰」～

公益財団法人孔子の里
理事長（多久市長）横尾　俊彦

NHK大河ドラマの「西郷どん」の主演・鈴木亮平さんは演じる役に合わせ肉体改造も徹する俳優。笑顔が息子に似ていることもあり観ています。

「西郷どん」とは西郷隆盛です。明治の元勲でひときわ庶民に慕われた人物です。同郷同年代の大久保利通と友情が厚いものの異なる生き方となります。それは佐賀出身の江藤新平に似ています。西郷と江藤は「他者への愛情」「頼まれたら放っておけぬ」共通点があるようだと、司馬遼太郎が江藤新平を描いた小説『歳月』読後に感じたものです。情に厚い分、冷徹になれず、人々と走る。それが西南の役、佐賀の乱に繋がったのではという分析です。でも、猛進した大久保さえ暴徒に殺害される明治という国家は辛苦の渦でした。

「天を敬い　人を愛す」

西郷隆盛といえば「敬天愛人」がありますが、この「敬」は多久聖廟にも通じると受け止めています。

まずは薩摩の「敬」です。西郷の信条を記した「西郷南洲遺訓」が有名です。庄内藩の人々に語った西郷の教えが記され、今に伝わっています。内容は、幕末の儒学者・佐藤一斎の著書『言志四録』から、西郷が特に心に響いたとして厳選した一〇一の言葉です。

その中に「敬」があります。「敬すればすなわち心清明なり」、「己を修むるに敬を以てし、人を安んじ、百姓を安んず」などです。

「敬天愛人」については「道は天地自然の物にして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は我も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心を以て人を愛する也」。現代語訳は「道というのはこの天地のおのずからなるもので、人はこれにのっとり行うべきだから何よりもまず天を敬うことを目的とすべきである。天は他人も自分も平等に愛したもうから、自分を愛する心をもって人を愛することが肝要」（西郷南洲顕彰会発行『南洲翁遺訓』より抜粋）です。

若い西郷が、命懸けの苦難を越えて紡いだ信条と目標です。艱難の奥底で使命を見出しています。

「敬は一心の主宰」

次に、多久の「敬」です。一七〇八年の多久聖廟創建の際、多久茂文公の熱い思いは『文廟記』に残され、「敬は一心の主宰」「万世聖学の基本たり」とあります。

「敬」は先生や目上の人を重んじることですが、さらに、真理・真実・聖学を敬えば、自身の未熟さを知り、慎むという意もあると理解しています。古典『大学』にある「慎独」に通じる基本の教えです。人格陶冶には慎み、専心し努めることが何より重要です。

謙虚・謙遜・慎みは品格練磨に不可欠です。俺が俺がと出過ぎることや、威圧的に虚勢を張ることを人は好みません。控えめで他を支える陰徳が評価されます。奥ゆかしき所作に、人は素直に感動させられます。

例えば、冬の平昌五輪で活躍した羽生結弦選手。フィギュアスケート金メダル連覇は六十六年ぶりの快挙でした。インタビューの時、羽生選手は手にかかえていたマスコットやプレゼントを一旦、床に置きました。その際、「国旗は床に置けないので、どなたか持って頂けますか」と頼んでいます。世界の常識、「国旗を尊重する」という基本ができているから、自然体でお願いし、インタビューにも応じています。

五輪メダリストにも光る「敬」の心

しかもそれで終わりません。普通はメダリストが国旗を身にまといアリーナを一周しますが、羽生選手はすぐに動きません。ライバルで銅メダリストのフェルナンデス選手がスペイン国旗を手にしてなかったのです。手渡されたことを確認し、日の丸を広げ、アリーナに向かい、金銀銅のメダリストが一周したのです。

これらを見ても、他者への思いやり、気遣いに流石と思えます。ライバルを「リスペクトする」、敬う心があります。まさに、品格あるチャンピオンの姿です。

「敬」はもちろん『論語』にもあります。「敬せずんば何を以って別（わか）たんや」。つまり「敬する心があらねば、何を以て犬馬と異なることがあろうか」の教えです。人が人たるに欠かせぬものです。そんな基本中の基本を「敬は一心の主宰」と、多久聖廟創建者・多久茂文公は祈りを込めたのだと思えます。

その多久聖廟の孔子像は、伊藤仁斎と並ぶ当時の最高位儒学者・中村惕斎（てきさい）によるものです。名を残すなど世間的評判を求めることを良しとせぬ人物だったようで、わかりやすく儒学を説いたと伝わる惕斎に学んだのが武富咸亮です。この縁からでしょう、茂文公は孔子像製作鋳造を惕斎に頼んでいます。咸亮は孔子廟建立と学びの助言指導に尽力します。

大河ドラマ「西郷どん」が、明治維新百五十年を学ぶきっかけになればと思います。維新を担った志士たちや志田林三郎博士ほかの志の根底に「敬」を重んじる儒学があったことを知り、改めて維新に学びたいものです。青春時代、下積み時代、飛翔する時代、それぞれの局面での「西郷どん」の姿がたのしみです。

学びに限りなしですね。さあ、頑張りましょう。

「梅山山領先生碑」建碑の顛末

草場佩川の会　副会長　尾形　恵子

佐賀市精町水月禅寺の門をくぐると、正面に堂々たる石碑が建っている。「梅山山領先生碑」、一辺一三七cm高さ一〇cmの基壇に一辺九二cm、高さ四三・五cmの上段を重ね、その上に乗る竿石は縦五四・五cm横五五・五cm、高さ一六〇cmを超えている。この碑の建立は草場佩川の声掛けによって始まった。

山領梅山　宝暦六年（一七五六）～文政六年（一八二三）国会図書館データベースでは「ヤマミネバイザン」とされているが、通例にならい「ヤマリョウバイザン」として差障りはないと思う。利昌、主馬、ともいい、また「珮川日記」では「憂玉翁」「嶺翁」などと記されている。山領タイ捨流の師家を継ぐが、国文和歌、有職故実に精通し、江戸後期の佐賀の文化に異彩を放っている。

山領梅山と草場佩川とは三十歳ほどの年齢の開きがあるが、「珮川日記」には梅山との緊密な交流のあとが克明に残されている。数年に亘る書簡のやりとりは週に二度に及ぶこともあった。時として手紙をしたためたものの応酬を待ちかね、夜に直接梅山を訪ね、それでもなお飽き足らずに翌日再び訪問して話し込んだこともある。当時の梅山は実兄である牧玉山（佐野常民の養父）、弘道館の原田復初などとよく私的な会合をもっていたようで、佩川はしばしばその席に呼ばれている。会合は泊りがけになることもあった。梅山が隠棲した川上の梅炉楼にも幾度か宿泊し、その都度詩を賦して謝意を伝えている。こうした父と子ほどにも年の離れた交流を漢語で「父執」と記すようで、佩川の周辺には「父執」の知識人が揃っていた。年長者に可愛がられ引き立てられる徳性と諸芸の才を、佩川が備えていたというべきかもしれない。

文政三年（一八二〇）佩川は白河老公の命により、公の六十歳を賀する「桜花盃賦」を奉じている。白河老公とはもとの老中松平定信のことである。佐賀藩の陪臣にすぎない佩川にどうしてこのような栄誉が与えられたのか、「珮川詩鈔」によれば、その報せは友人である土屋子潤（江戸で古賀精里に学んでいた頃の仲間）からもたらされたとあり、「桜花盃賦」が古賀穀堂を介して献上されていることから、古賀家の紹介によるものかと考えていたが、「珮川日記」では、実はこの一連の出来事が山領梅山と今泉千春という二人の歌人の根回しによることが明かされている。また同じ頃佩川は梅山に頼んで、摂州からその年の春にたまたま発掘された銘入りの金牌の出土記録を取り寄せてもらい「金牌詩」という詩を残し、遠く多賀城の碑石にまで思いを馳せている。希石や希物を鑑賞して思いをめぐらすことは、当時の文化人にとっては「温故知新」のひとつの姿勢でもあった。

文政四年（一八二一）三月、梅山は多久を訪れた。タイ捨流の多久の弟子たちは演武場に揃って師を迎えた。この頃の多久邑校でのタイ捨流を修めていたのは三十三名だが、その後文政七年には五十一名となり、常に直心流を上回っている。佩川自身も著作「豆腐湯」のなかで、若い頃にタイ捨流を学んだことを述懐している。その夜は門弟蒲原氏の家で祝宴が催され、そのまま同家に宿泊している。翌日は武雄鍋島家の門弟から卓袱料理の誘いを受けていて、佩川も同道して相伴に預かった。

梅山と佩川二人の交流は、牧玉山、原田復初、今泉千春、古賀朝陽ら周辺の人々とのつながりを含めて間断なく続き、冬になると佩川はこれらの人々のところへ女山大根を進上して回った。ことに梅山に運んだ一品には「塊蘿蔔（らふく）」と「塊」の一字が添えられていて、よほど丸々と肥え太った女山大根を手に入れたものであろう、「年に幾畝分もの大根を食べている」と豪語した佩川の「女山大蘿蔔」の戯作詩が、丁度この頃作られていることともあいまって、冬の一日小脇に女山大根を抱えて、あちらこちらと佩川の街中を知人を訪ねて歩く佩川の姿が浮かんでくるようだった。

文政六年（一八二三）一月二十三日　水ケ江の多久屋敷にいた佩川に山領梅山の訃報がもたらされた。

二月二十七日　蝋燭と麩餅を携えて弔問に向かう。

二月二十三日　梅山の息子である外記（真武）が、ゆかりの人々を招いて供養の席を設け、そこで佩川に亡き父の肖像画を依頼する。梅山の残した希物を見せてもらうなど山領家との往来は続く。

十月十二日　佩川は外記に梅山の碑を建てる話をもちかける。前後の様子からすでに牧玉山や原田復初とは相談ずみのようである。

十月十四日　タイ捨流の高弟石井尉右衛門を訪ねて建碑のことを打診する。続けざまに今泉千春、古賀朝陽の元を訪れ同意を得る。

十月二十日　水月禅寺で建碑の下見をする。立ち会ったのは　原田復初、牧玉山、山領外記、今泉千春、石井尉右、そして佩川の六人である。立碑の場所を選定し、同時に碑石をどうするか、値段やその形状を論じあった。その時石井尉右が告げた。「相浦なども了承している。かつては老君（多久茂鄰）もこの翁の剣を学ばれたのだ。諸太夫（多久家、須古家、太田鍋島家など）からも資金を募り、門弟からは徴収する。山領タイ捨流一門をあげてこの挙に当たる」と。

こうなるととてもささやかな碑を建てるというわけにはいかない。一見すると知識人たちの優雅な交流のように見えるが、実はみな質実である。女山大根しかり、山領外記が父親の肖像画のお礼にと佩川に届けたのは懐紙三束という慎ましやかさである。資金集めこそが最大の難事であったと思われる。

高弟の多久の蒲原、河原、犬塚、深江簾蔵などただちに志を寄せてきた。しかし所詮は武士の算盤である。潤沢とは言い難かったようで、話を聞きつけた野中允卿（烏犀圓）から山領外記へ相当の献金が届く。武士たちの懐具合を「どうも心もとない」と案じた允卿の心遣いだった。

十二月の終わりには銀五両が集まり、石を刻む目途がたった。銀一両を銀六十匁とすると、これはおよそ三十七万五千円ほどに相当し、日記にはその内訳まで記されているのだが、「諸太夫各出金一円」というのはどういうことなのか、当時「円」という単位が使われていたのかどうか、諸太夫の人数もわからないのでこの件の検討は度外視しておきたい。門弟の高位者十余人は一貫二百銭、一般の門弟は四百銭、これらは一万一千五百円と三千八百円ほどになる、佩川ら友人たちはその間をとったとあるので、六・七千円ほどであろうか。ここには野中烏犀圓からの浄財は含まれていないようなので、建碑にはかなりの金額が必要だったと察せられる。

文政七年（一八二四）三月　碑石の刻銘がなされた。五日、七日と碑文の石刷りが行われている。そして七日

いよいよ建碑の日を迎えた。この日のことを佩川は日記に「勉疾到水月庵」と記している。「勉疾」とは、「有力者疾以助人　有財者勉以分人　有道者勧以教人」力がある者は速やかに人を助け、財がある者は人に分けるように勉め、道がある者は人に教えることを勧めるという墨子の言葉で、この水月禅寺に墨子の言葉が実現をみたとする佩川のあまりにも短い一行には、言葉に尽くせぬ万感の思いが込められていたのだった。翌八日　佩川は不足分など残金の支払いをすませた。

こうして「梅山山領先生碑」は落成した。撰文　原田復初、　書　古賀朝陽　そこに佩川の名前はない。年齢と社会的地位からの配慮であろうか。しかしながら、佩川が梅山の死に寄せた真情は「珮川詩鈔」のなかに切々と綴られていた。

実は随分以前にある作品の画像を見る機会があった。それは竹林に霞んだ月のかかる大幅で、その筆致に目を奪われたが、同時にそこに賦された賛の特異さが強く印象に残った。「爺帰弗、爺帰弗」この賛は何だろうか。爺が帰ったのか、それとも帰らなかったのか、実のところそれすらわからず、その後この「爺帰弗」の文字が「珮川詩鈔」にあることを見つけたが、それだけで満足して、爺の正体を突き止めようなどとは思いもよらずにいた。ところが今回、梅山と佩川のかかわりを詩のなかに辿っていく過程で、はからずもこの爺が梅山であることに初めて気がつき、いいしれぬ感慨を覚えることになった。どうやらあの絵の霞んだ月は、世を去った梅山の魂を映していたようである。そして梅山を慕う佩川の思いは「不如帰」とされる　「ホトトギス」に寄せて詩の全編に巡らされていた。

文政七年の秋、主人なき梅炉楼に再び宿泊する。

夜半、夢うつつのなかに何かの連呼の声が聞こえてきた。「ジイキフツ　ジイキフツ」何事だろうか、ああ　そういえば越人は子規（ホトトギス）のことを「爺帰弗」というと袁中郎の詩集のなかにあった。ホトトギスが啼いているのだ。

「爺帰弗　爺帰弗」「爺は帰らざりき」　そうだ、爺はどうして帰って来ないのだ。

もしかしたらあの仙人洞にいるかもしれない。夢のなかで尋ねてみる。そこには微かな灯りが灯っているように見えたが、その火はたちまち風に消えてしまった。尋ねても尋ねても無駄なのか、

爺、私の爺はどうして帰って来てくれないのだ。

血を吐く思いで夜を明かすと、朝露のなかにひっそりとホトトギスの花が咲いていた。

参考文献
山領主馬とその時代　大園隆二郎　「新郷土」
珮川日記
珮川詩鈔

▲梅山山領先生碑
（水月禅寺）

再宿二梅炉楼一聞二子規一有レ感
（客歳主翁物故）

爺帰弗爺帰弗
（越人呼子規云爾見于袁中郎集）
底事連呼聲髣髴
爺兮爺兮胡弗レ帰
炉頭楼閣成二故物一
此夜楼中来結レ夢
欲レ尋仙人六六洞
夢魂恰似蛍火飛
一転忽被松風送
夢回黯澹徒長嗟
去弗レ帰兮奈二我爺一
啼血聲中興視レ夜
暁露満山杜鵑花

梅炉楼に再び宿せば子規を聞く感有り
（昨年主人の翁は物故す）

ジイキフツ　ジイキフツ
（越人は子規を呼んでこういうと袁中郎集に見る）
底事（なにごと）か連呼の声　髣髴
爺や爺や　胡（などて）　帰らざりき
炉頭楼閣は物故と成り
此夜楼中に来りて夢を結ぶ
尋ねんと欲す　仙人六六（ろくろく）の洞
夢塊（むこん）あたかも蛍火の飛ぶに似て
一転忽ちにして松風の送らる
夢回（むかい）暗澹として徒らに長嗟（なげく）は
帰らざりき　奈（なんぢ）　我が爺
啼血の聲の中　興きて夜を視れば
暁露満つ　山　ホトトギスの花

子規　ホトトギスのこと　不如帰
袁中郎集　袁宏道　明代後期の詩人
髣髴　彷彿
炉頭楼閣　楼閣の主人
六六洞　六×六　三十六　道教で仙人が棲むとされる三十六洞
啼血聲　啼いて血を吐くといわれるホトトギスの鳴き声
山杜鵑花　ホトトギス（山野に自生するユリ科の多年草）

多久聖廟での雨天祈願

公益財団法人孔子の里　事務局長　江口　正晃

①はじめに

多久聖廟といえば、観光及び学業成就を目的に参拝される方が多い。特に一月から三月の親子連れの参拝者の多くが学業成就祈願である。そして、四月からゴールデンウィークにもお礼参りとして多くの親子連れの参拝者がみられる。

一方、江戸時代の多久聖廟では儒学の神として崇められる以外にも雨天祈願が行われている。今回は、多久の儒学者の日記である『草場珮川日記』の記述を中心に多久聖廟の雨天祈願について考察する。

②雨天祈願の記述

今回は、草場珮川が多久在住で多久聖廟と関わりが深く、多久領での天候不順があったと思われる文化十（一八一三）年から文政五（一八二二）年までの記述を考察する。

文化十年というと草場珮川は二十七歳。文化八年に東原庠舎（多久領の郷学校）に奉職し、在職二年目であり、この年に東原庠舎学監に就任している。多久聖廟や東原庠舎の行事にも運営側として深く関わるようになっていると考えられる。この期間の日記の記述から雨天祈願に関する記述のみを取り上げると史料一から七の記述がある。

史料一　文化十年　十一月
廿八日、聖殿雩楽始、命撃鼓、

史料一の廿八日の記述では、聖廟にて「雩」とある。この「雩」は、雨乞いの意味である。雨乞いのために雅楽を始め、その際に太鼓を打つよう命じられたのではないかと考える。

史料二　文化十一年五月
廿五日、祈雨、聖宮張楽、終日不雨、

史料二では、雨天祈願の為、聖廟で「張」の記述から、弦楽器による雅楽を奏でたと考えられる。現在の多久聖廟の雅楽では、弦楽器はないが過去には琵琶、琴が使用されている。現在も昔使用されていた琵琶が多久市郷土資料館に保存されている（写真一）。このことから琵琶又は琴で雅楽を奏で雨天祈願を行ったと推測される。

史料三　文化十三年七月
廿九日、為学田枯渇、与同僚謁聖廟、祈雨終日、廿沢忽降、謝以一鼓三管、
八月
十三日、為闔邑畏旱、故命宰臣僚属、詣聖廟幷奏楽、以祈雨、不雨、

史料三は、文化十三年の記述である。七月廿九日の記述は、学田枯渇の為雨天祈願を行っている。学田とは東原庠舎の運営費用を賄うため多久家が与えた田地のことである。この祈願は、終日行われ、雅楽も鼓一（太鼓等）と管三（龍笛など）が雅楽で使用されたと考えられる。この時は、祈願の効果があり、「忽降」の記述から雨が降ったと思われる。

また、翌月の八月十三日には、多久領内の干ばつのため、上級家臣の命にて聖廟にて雅楽を奏で、雨天祈願を行ったが雨が降らなかったことがわかる。

史料四　文政四年七月
四日、命聖殿奏楽祈雨、至夜半乃雨、

史料四では命により雅楽を奏で、雨天祈願が行われて、夜半に雨が降ったことが記されている。

史料五　文政五年二月
廿四、聖廟有祈雨之事、張楽徹明、時庁官及郷官里正等皆至、雨終日終夜乃止、蓋不雨二旬余、牟麦将枯、至是始蘇活、言是日伶官廿名、

史料五では、多久聖廟にて雨天祈願を行い、琵琶や琴などで雅楽を引き祈願している。この時の参加者は、多久領の上級から下級の役人が皆出席し行われ、雨が降り、枯れていた麦が蘇り始めたことが記されている。また、この時の伶官（雅楽演奏者）が二十名と記されていることをみると、これまでの雅楽演奏と比べると大人数で雅楽演奏が行われたことがわかる。因みに現在の雅楽隊の伶人（雅楽演奏者）の数は二十四名であることを考えると当時の雅楽演奏者のほとんどが参加していたのではないかと推測される。

③他所での雨天祈願

草場珮川日記には、同時期に多久聖廟以外での雨天祈願についても記述があるので紹介をする。

史料六　文化十一年六月
朔日、龍王祠祈雨張楽、前日小雨、

史料六では、龍王祠で弦楽器（琴又は琵琶）を奏で、雨天祈願を行ったことが記されている。

史料七　文化十三年八月
十九日、八幡祠観雩祭、遇雨、

史料七は、八幡祠での雨乞い祭りを観覧し、思いがけない雨に見舞われたと考えられる。

④雨天祈願の方法

これまで見てきた史料一から七から推測すると当時の雨天祈願の方法について次のようなことがわかる。

- 雅楽を奏でており、演奏する楽器はその時々で違ったこと。
- 祈願については、領主又は上級家臣からの命令で行う場合と数名で自主的に行う場合があったこと。
- 参加者も東原庠舎同僚で行うこともあれば、領内の上級から下級家臣まで参加など規模がそれぞれ違っていたこと。

以上の三点がこの時期の日記から考察される。

⑤おわりに

私は、これまで雨天祈願や雨乞いというのは、神社でお供え物や踊りを披露し祈りを捧げる印象があった。しかし、多久領では、神社以外にも孔子様を祀る多久聖廟で雅楽を奏でながら祈りを捧げていたことが分かり、多久聖廟の新たな一面を知ることができた。

今後の課題としては、御屋形日記など他の史料との比較や晴天祈願についての調査を行いたい。

【参考文献】
三好不二雄監修・三好嘉子校註解題『草場珮川日記（上）』西日本文化協会、一九八〇年

写真一　琵琶（郷土資料館蔵）

第二十回 全国ふるさと漢詩コンテスト

平成二十九年十二月二日（土曜）

公開講座　演題『草場佩川の詩』～三島中洲九州遊行に関して～

講師　石川　忠久 先生

（公益財団法人斯文会理事長・学校法人二松学舎顧問）

平成二十九年十二月二日（土）、「第二十回全国ふるさと漢詩コンテスト」の表彰式が行われました。

江戸時代の邑校東原庠舎で学ばれていた古典や漢学に親しんでもらおうと始まったこの漢詩コンテストも二十回を迎えることができました。

今回は「樹」又は「草」をテーマに公募され、国内三百二十五点、海外から四点の計三百二十九点の作品が集まり、石川忠久先生と佐藤保先生（お茶の水女子大学名誉教授）に審査いただき、最優秀賞に福岡県の大森一廣さんの『訪屋久島縄文杉』が選ばれました。

大森さんの作品は聖廟展示館敷地内に詩文を陶板に刻んだ石碑が建立され除幕式が行われました。

最優秀賞

福岡県福津市　大森　一廣

訪屋久島縄文杉
寂寞山中踏蘚行
巨杉高聳使人驚
樹邊幾繞觸根幹
洗耳閒聞太古聲

屋久島の縄文杉を訪う
寂寞たる山中蘚を踏んで行けば
巨杉高く聳え人をして驚かしむ
樹辺幾たびか繞りて根幹に触れ
耳を洗い間かに聞く太古の声

優秀賞

春日野遊
櫻花花信出門之
東野風吹紅影奇
樹下坐筵能養老
論詩讌酌日遲遲

神奈川県川崎市　住田　笛雄

春日野遊
桜花の花信に門を出でて之けば
東野に風吹いて紅影奇なり
樹下筵に坐し能く老を養う
詩を論じ讌酌し日は遅々たり

優秀賞

奉納写経会
昨宵微雨送新涼
双樹花開庭院香
斉欲写経臨浄几
千年静寂在僧房

大阪府泉佐野市　角岡　忠

奉納写経会
昨宵の微雨 新涼を送り
双樹花開きて庭院香し
斉しく経を写さんと欲して浄几に臨めば
千年の静寂 僧房に在り

入選

屋久島縄文杉
洋上青螺樹鬱蒼
不逢斧鉞幾星霜
瘤根盤地十圍幹
尖杪凜乎如劍鋩

神奈川県横浜市　城田　六郎

屋久島の縄文杉
洋上の青螺 樹鬱蒼
斧鉞に逢わざること幾星霜
瘤根地に盤る十囲の幹
尖杪凜乎として劍鋩の如し

入選

過舊廬
廢井苔階蟲語滋
西風搖動碧梧枝
簷前墜葉無人掃
白露荒庭橘柚垂

神奈川県横浜市　杉森千枝美

旧廬に過る
廃井の苔階 虫語滋し
西風揺動す碧梧の枝
簷前の墜葉 人の掃く無く
白露の荒庭 橘柚垂る

入選

初春散歩逢花
新雪纔残山徑隈
東風吹度淡煙開
無端逢著奇葩影
此是報春金縷梅

宮城県仙台市　菊池　健

初春散歩して花に逢う
新雪纔かに残る山径の隈
東風吹き度り淡煙開く
端無くも逢著す奇葩の影
此れは是れ春を報ずる金縷梅

奨励賞

古城春望
尋來城郭婉陽春
濠畔櫻雲映水新
千載興亡花不語
只殘石壘對風塵

佐賀県佐賀市　古賀千恵子

古城春望
尋ね来る城郭 婉陽の春
濠畔の桜雲水に映じて新なり
千載の興亡 花語らず
只残る石塁 風塵に対す

（左から）田原優子（多久市教育長）、大森一廣様ご夫婦（最優秀賞受賞者）、石川忠久（審査委員長）、横尾俊彦（多久市長）

『水江事略』全十九巻十一冊には、室町後期の龍造寺村（現佐賀市城内）時代から元亀元年（一五七〇）の多久入城に至り、明治時代が始まる會津戦争出兵迄の水江龍造寺氏（後の多久氏）と家臣達の事績を記した貴重な古記録です。旧多久市立図書館司書・細川章氏の複写本のコピーを底本として佐賀県立図書館所蔵の複写本を参考に活字にして連載をします。

第一巻には、水ヶ江の地名の由来。大内氏による小弐氏の追討により、小弐政資、冬尚が多久専称寺で自害した記録。龍造寺氏と鍋嶋氏が姻戚関係を築く記録。馬場頼周の謀で龍造寺家兼の子や孫六名が河上神社、祇園原で討ち死にした時の事、筑後一木村に逃れていた家兼と曾孫長信が与賀・河副の郷士の協力で水ヶ江城を奪回すること等、戦国の戦いの記録が記されています。

水江事略　第壹號

水江草創之譜

剛忠金公之譜　天文十五年丙午ニ至ル

水ケ江草創之譜

龍造寺隠岐守康家公御法名ハ定翁正公延徳ノ此新館ヲ城ノ南槙村ニ建テ龍造寺ノ惣領ヲ世子家和公ニ御譲リ有テ新館ニ移ラル家兼公**（時ニ孫九郎ト云）**是ニ従ハル時ニ明應元年（一四九二）ナリ龍氏ノ住ムベキ所ナレトテ舘ニ名付テ水江ト云抑水アレハ龍アリ龍アレハ水アリ龍ト水ト相和シテ雲行雨施シ卒土充洽フトイヘリ依テ龍ハ水カ家ナリトテ是ノ如ク名付ラレタリ**（初ハ水ケ家ト書キシヲ後江ト改メシハ家ト江ト倭音相通スル故ナリ）**

家系事蹟　一説ニ文明十四年壬寅（一四八二）少貳政資佐嘉ノ舘ヲ修シ休息ノ所トス龍造寺忠俊**（康家公ノ初ノ御名）**ヲ當國ノ代官トス小津ノ入江舘ニ近シ両岸ノ商家喧囂ナリ西岸ノ在家移リシ所ヲ今津ト云東岸ノ在家移リシ所ヲ今宿ト云入江ノ究マリヲ相應ト云小津郷ノ名ヲ改テ與賀ノ郷ト云

舘外ノ村里水ケ江ニ附属スル者袋末次鹿子新郷木原竹藤古閑南里江上等ナリ河副十町モ亦水ケ江ノ采地ナリ明應年中康家公水ケ江ノ舘ヲ家兼公ニ譲リ又東ノ舘ヲ築テ爰ニ隠居セラル康家公永正七年庚午（一五一〇）三月二十一日御卒去慶雲院ニ葬ル御法名ヲ定翁浄正居士ト号シ慶雲院殿ト謚ス則龍造寺ノ御中興ニシテ我水ケ江ノ第一世ナリ

剛忠金公譜

水江第二世龍造寺山城守家兼公**（初名孫九郎元服シテ左衛門佐ト改ム亦兵庫助）**享徳三年甲戌（一四五四）龍造寺ノ御城ニテ御誕生アリ御父隠岐守康家公御母ハ筑前太宰府ノ人小鳥井信元ノ息女ナリ延徳元年己酉（一四八九）家兼公御歳三十六父康家公ノ命ヲ受テ新舘ヲ槙村ニ築カル御成就ノ上康家公是ニ移玉フ家兼公モ是ニ従ハル家臣鷲崎石井木下福地吉岡江副古閑以下ノ者三十余人舘ノ邊ニ移リ住ム忽チ一城郭ヲ為ス名付テ水江ト云

明應元年壬子（一四九二）　家兼公御年三十九歳

父康家公ノ御譲リヲ受テ水江ノ家督ヲ嗣セラル

同六年丁巳（一四九七）　家兼公御年四十四歳

夏四月大内氏ノ兵少貳政資ヲ追テ小城ノ城ヲ攻ム政資敗レテ多久ノ城ニ逃レ城主多久藤左衛門尉宗時ニ依ル大内氏又藤左衛門ニ謀テ是ヲ伐シム政資力盡テ専稱寺ニ自害ス四月十九日ノ夜ナリ死ニ臨時酒ヲ飲ミ乾梅ヲ肴トセリ其核ヲ噛刻地ニ投打テ云此核必生シテ永ク我死場ノ験トナント云捨テ自殺ス果シテ其言ノ如ク明春ニ至リテ土中ヨリ萠出次第ニ生長セシカ**（其花薄紅ニシテ核自ラ割タリ）**今猶遺リテ古木ノ梅ト云**（又少貳梅トモ云此種ノ梅ハ世ニマヽアリテ奇トスルニ足ラザレドモ古蹟ナレバカクハモテハヤスナルベシ）**

住僧死骸ヲ寺ノ東北ニ葬リ石塔ヲ建ツ又政資死ニ臨テ傍ノ人ニ問テ云此邊ニ禅門ノ知識ハナキヤ傍ノ人圓通寺ニ玉宗和尚ト云禅知識アリト答フ政資一封ノ書翰ヲ玉宗ニ贈リテ引導ヲ受ン事ヲ乞フ故ニ又圓通寺ニモ位牌アリ牌銘ニ前三州太守太宰少貳都督司馬少卿安養院殿明哲本光大禅定門神儀トアリ

家系事蹟　大内義興将軍ノ命ヲ受テ少貳政資ヲ退治セシム政資軍敗レテ多久奔ル

永正二年乙丑（一五〇五）　家兼公御年五十二歳

春三月禅僧三十餘人ヲ舘内ニ請シテ法華經一万部ヲ讀誦セシム經巻ヲ僧衆ニ布施セラル是ハ子孫繁昌家業興隆祈願ノ為ナリト云

同三年丙寅（一五〇六）　家兼公御年五十三歳

冬十月大内介義興東尚盛筑紫満門ヲ大将トシテ軍兵ヲ遣シ小城郡ニ来リ千葉屋形胤治ヲ攻ム胤治敗レテ筑前ニ奔ル龍造寺胤家**（康家ノ嫡子家兼ノ兄）**等一族ノ人々多ク是ニ従フ歳餘ニシテ國ニ歸ル

或説ニ云千葉胤資ハ少貳政資カ弟ナリ政資ニ同意シ晴氣ノ城ニ楯籠ル東筑紫大内ニ属シテ是ヲ攻落ス胤資自害ス弟頼經疵ヲ被リ松尾ニ行テ死ス千葉胤盛河副

ヨリ起リテ東尚盛ト河上ニ合戦ス胤盛筑前ニ行龍造寺胤家是ニ従フ

同七年庚午（一五一〇）　家兼公御年五十七歳

春三月二十一日御父康家公卒セラル

其後太永享禄ノ比ニ當テ龍造寺ノ城ニハ隠岐守家和公（**家兼公ノ兄**）ヲ主トシテ其所領凡一千三百余町也

龍造寺八十町與賀千町六郷本庄八十町其外嘉瀬新庄巨勢小城郡ナリ

本城ニ属スル一族ニハ盛家（**胤家ノ嫡子兵部又伯耆守**）胤直（**盛家ノ弟右京亮**）満家（**盛家ノ子三郎四郎法名尖齋宗運**）家重（**盛家ノ子右衛門太輔又日向守**）常家家親（**胤直ノ子播磨守**）胤久胤門等家臣ニハ納冨土橋小川西村堀江等ナリ其大半ハ千葉屋形ニ属セリ水江ニハ家兼公ヲ主トシテ其子孫家純公家門公周家公家泰公純家公頼純公等各舘ヲ立テ分居セラル本館中舘東舘西舘トテ皆父子兄弟叔姪ノ住家ナリ其外家臣居宅前後左右ニ相列リ水江マスマス繁榮ス享禄ノ比家兼公御家督ヲ御嫡子家純公ニ御譲リアラントテ家純公ヲ始御一族老臣ノ輩ヲ集メテ此事ヲ告ラル家純公辞シテ曰ク不肖ノ某本ヨリ一門ノ主ト成ルノ器ニ非ス且ハ病身ナリ父ノ仰ニ違様ニ候得共家ノ為人ノ為愚存ノ次第申上スシテハ叶ハサル事ナリ凡下トシテ上ヲ諫ムルハ昔シ今ニ難キ御事ニテ老臣等ヲ頼ミニモイタシ難シ家君御在世ノ間ハ我々カ輩皆仰ノ儘ニ行ヒ候ヘバ過チモ少ク候ハンカ百歳ノ後又誰ノ命ヲ受テ事ヲ行ハンヤ然レハ家純不肖ナカラ家門カ後見トシテ萬ノ事ヲ相計リ惣領ヲ守立ントノ本意ニ候家門コソ父祖ノ箕裘ヲ承嗣テ家業ヲ興スベキモノナリ彼ニ家ヲ譲リ玉ヘト仰ラレシカバ家門公モ亦辞シテ曰ク某争テカ兄ニ超テ當家ヲ嗣ンヤ家純公ノ曰ク卿ニ譲ル私ノ事ニ非ス達テ辞スル事ナカレ家純カ生質ハ家君明ラカニ知リ玉フ所ナリ家兼公終ニ家純公ノ御断ヲ御聞入有テ惣領ヲ家門公ニ譲リ玉ヒ家兼公ハ東舘（**今ノ天神屋敷ナリ**）ニ御移リ家門公ハ本舘（**今ノ乾亨院**）ニ家純公ハ中舘ニ御移住居西舘ニハ純家公其外御同居アリ

抑當國ハ太宰少貳氏ノ所領ナリシニ大内氏軍兵ヲ遣シテ筑前ヲ掠奪シテ其兵次第ニ當國ヲ侵ス少貳資光（**政資ノ末子**）新少貳冬尚ハ大宰府ニ在リシカ兵ヲ避テ當國ニ来リ旧好ノ城持等ヲ語ラヒ大内カ兵ヲ退ケ本國筑前ヲ取復サンコトヲ謀ル

享禄三年庚寅（一五三〇）　家兼公御年七十七歳

秋八月大内義隆兵ヲ遣ハシテ少貳ヲ伐ツ家臣陶尾張入道道麒杉豊後守興（**宰府代官**）大将タリ先陣ハ筑紫尚門朝日頼貫来テ米多原ニ陣ス少貳屋形龍造寺ノ一族ニ命シテ是ニ當ラシム龍家是ニ應シ兵ヲ出サル本城ノ宮内太輔胤久（**胤和ノ子**）水江ノ家兼公父子発向セラル田手村ニ於テ兵ヲ接ヘ勵ク妨キ戦フ戦ヒ半ニ至リ鍋嶋清久父子一族精兵百余人不意ニ起テ横合ヨリ懸リ烈ク撃戦フ大内方忽チ敗走ス水江ノ有兵透サス追打テ苔野口ニ迫リ敵将尚門頼貫ヲ討テ首ヲ取リ大ニ勝テ歸ル我河副ノ千町ハ此日ノ勲功ノ賞ナリトソ家兼公又清久父子ノ戦功ヲ褒ス後家純公ノ長女（**花渓**）ヲ清久ノ子清房（**孫四郎駿河守**）ニ妻ハシ本庄八十町ヲ婿引出トス是龍家鍋嶋御親シミヲ結ハル、ノ始メナリ此戦ヒヨリシテ水江ノ威名益現ハレタリ

少貳冬尚馬場横岳小田等ト相會シテ田手村ニ戰フ軍難義ニ及ブノ處龍造寺家兼同家門一族郎従數百人馳来テ冬尚ヲ救フ赤熊武者五六輩先ヲ戰フテ奮擊ス遂ニ筑紫朝日ヲ討取リ大ニ勝利ヲ得タリ冬尚家兼公父子ノ戰功

多久聖廟　春季釈菜のご案内

日時　平成30年4月18日（水）　10時～12時10分　　**場所**　多久聖廟

① 執事・伶人 入場	10時～10時20分（聖廟参道）
② 献官・祭官 入場	10時20分～10時30分（聖廟参道）
③ 釈菜（せきさい）	10時30分～11時30分（聖廟内）
④ 釈菜の舞	11時30分～11時45分（聖廟境内）
⑤ 参列生徒の唱歌	11時45分～11時50分（聖廟境内）
⑥ 揚琴の調べ	11時50分～12時（聖廟境内）
⑦ 孔子の里腰鼓	12時～12時10分（仰高門前）
お呈茶	10時～14時（東原庠舎）

※諸事情により予定を変更する場合がございますので、あらかじめご了承願います。

ヲ賞シテ河副一千町ヲ賜ハル赤熊武者ハ鍋嶋平右衛門
父子三人郎従野田ナリ　家系事蹟
天文三年甲午（一五三四）　家兼公御年八十一歳
大内義隆老臣陶尾張入道道麒ヲ大将トシテ數萬ノ軍兵ヲ
属シ又少貳ヲ伐シム道麒来テ美津山ニ陣ス少貳屋形又兵
ヲ水江ニ請フ水江是ニ應ス
秋七月中旬暴雨大風數日止マス南海ノ潮漲来テ佐嘉神埼
ノ村里一面ニ海トナル大内ノ軍是ヲ見テ手ヲ打テヨロコ
ビ刃ニ血ヌラス鋒先ヲ動カサスシテ居ナカラ敵ヲ鏖ニス
ルトテ終日酒宴ヲ張リ用心ノ体更ニナシ家兼公此機會ヲ
察セラレ家純公家門公純家公以下御一族家臣屈竟ノ勇兵
三百余人ヲ率テ水江ヲ発シ深キ所ハ舟筏ニ飛乗リ殘キ方
ハ或ハ潜リ或ハ游キ夜半比難ナク敵陣ニ付鯨波ヲトツト
揚ケ烈火ノ如ク切入タリ敵ハ不意ヲ討レテ陣々俄ニ騒動
シ取物モ取アヘズ七顛八倒シテ敗走ス我兵得タリト追詰
テ首ヲ切ルコト數ヲ知ラス大内勢一戦ニ退散シ我軍凱歌
ヲ揚テ水江ニ歸ル少貳屋形大ニ水江ノ戰功ヲ賞シ采地ヲ
加フ初メ家兼公水江ヲ発セラル、時一躯ノ佛像潮ニ連レ
テ南海ヨリ流レ来ルヨクヨク見レハ観音ノ像ナリ出陣ノ
時ニ臨テ是ヲ得ル事勝軍ノ瑞相ナリト大ニ悦ヒ玉ヒシカ
果シテ勝利ヲ得ラレシカハ御歸陣ノ後一宇ヲ建テ其像ヲ
安置セラル今慈教院ノ本尊是ナリ
冬十月大内義隆九州ノ軍功ナキヲヤ憤リケン自大軍ヲ率
テ渡海ス先陣ノ将陶道麒山陰山陽ノ軍兵六萬余騎ヲ率テ
又美津山ニ陣ス軍ヲ分テ二ツトシ一軍ハ西ノ方藤津郡ニ
到リ有馬大村等ノ兵ヲ合セテ毛見嶽ニ陣ス少貳一家ヲ責
潰サントノ結構ナリシカ頓テ和議ヲ龍造寺ニ求ム龍造寺
ノ両家御和平アリ是ニ依テ少貳ト大内ト和平成ル是畢竟
少貳ノ威風衰微ノ致ス所ナリ陶道麒ハ猶在陣シテ退カス
鎮西志　資元家兼ノ大功ヲ賞シテ小城佐嘉ニ於テ數縣
ノ地ヲ加封セラル巨勢尼寺大町小城等ノ地水江ニ附セ
シハ此時ナラン
十月義隆龍造寺家兼ト和睦ス是ハ原田越前守大村讃岐
守トノ扱ニ依テナリ
同四年乙未（一五三五）　家兼公御年八十二歳
秋冬ノ比少貳盛福寺（神埼郡城原ニアリ）ノ城ヲ去リ資元ハ
多久ニ奔リ新少貳冬尚ハ大荘ノ城ニ隠ル
同五年丙申（一五三六）　家兼公御年八十三歳
秋九月四日少貳資元多久城ニ於テ卒セラル専稱寺ノ境
内父政資ノ墓ノ側ニ葬ル政資ノ例ニ随ヒ圓通寺ノ住僧
来テ引導ヲナシ位牌ヲ父ト共ニ寺ニ安置ス牌銘前三州
太守太宰少貳都督司馬少卿心月本了大居士神儀
或説ニ曰少貳資元筑前ニ於テ軍敗レ又脊振山ニ敗レ佐
嘉ニ落来リテ福満寺ニ入ル時ニ末ノ十二月晦日ナリ翌
年正月蓮池ノ城ニ入ル道麒江上氏ヲ遣シテ是ヲ索ム資
元竟ニ多久ニ奔ル多久宗時カ女資元カ妾ト成ルカ故ナ
リ宗時厚ク懇切ヲ盡セシカ共病ニ罹リテ終ニ卒去スト
云々
又一説ニ宗時ノ弟ニ宮内太輔ト云者アリ逆心ヲ発シ大
内ニ属シ兄宗時ヲ勧メテ資元ヲ殺スト此説疑ラクハ政
資自殺ノ時ナランカ
冬十月大内義隆家兼公ヲシテ守護代トシテ国務ヲ執行
ハシム道麒ハ中國ニ歸ル
鎮西志　十月二十九日陶尾張入道道麒肥前國ヲ治テ防
州ニ歸ル肥前ニハ千葉喜胤國務ヲ為ス龍造寺家兼守護
代トシテ國郡ノ雑事ヲ取行フ
同七年戊戌（一五三八）　家兼公御年八十五歳
家兼公宿殖徳本ノ御志願アリテ大乗妙典ヲ讀誦セシム
今年已ニ一萬部ニ満ツニ月中旬良辰ヲ擇ヒ荘嚴場ヲ榮
ミ僧衆一百十員ヲ請シ七日ニシテ一万部ヲ誦シ終リ所
願成就シテ供養ヲ行フ此日家兼公祝髪シテ剛忠ト名付
ク導師ハ水上山天亨長老ナリ（一説ニ春日山ノ登岳和尚ナリ
共）
傳ニ云天亨禪師龍造寺氏ニシテ正公ノ御子ナリ万壽寺
ニ住スル事年アリ
永正十四年紫衣勅願ノ宣命ヲ乞フ免許セラル水上ヲ稱
シテ紫衣地ト云ハ此時ヨリノ事ナランカ其香語一二ヲ
取テ是ヲ録ス
恭惟
城州太守左金吾戒名剛忠
胸呑四海道契三公士卒普霑恩惠軍旅齊稱英雄子其
子而子々全授武運於一卷張君其君而君々長仰仁德於
三呼嵩萬部法輪轉宇宙無孔鉄鎚舞春風（以下略之）
萬部供養ノ講事ノ次第
一水江舘中新ニ浄舎ヲ造テ道場トス
今ノ乾享聽松玉峰等ノ寺院其跡ナリ
一大衆ノ休察百間并配膳ノ所數間
今ノ観音堂ノ地并近邊左右ノ地其所ナリ
一道場ト休ミ所ノ間路ノ左右ニ俵ヲ積ム事高サ六尺
是ヲ以テ垣トシ是往来ノ僧衆目ヲ觸サル為ナリ後
日俵ヲ僧衆ニ施行ス
一衣服并飲食ノ諸具皆新ニ是ヲ設ク後日僧衆ニ施ス
一法華経一百部新帙ニシテ（經箱經机共々）是ヲ百口
ノ僧ニ配ス

一書寫經一百部
金公浄身潔齋シテ毎朝自ラ硯水ヲ洒キ焼香禮拜敢テ怠ラス
一布施ヲ行フ各差アリ
古老ノ傳ニ云金公布施ヲ行フ差アリ導師及ヒ高寺泰長慶雲院等長老ノ布施衆ニ倍スル三増ナリ爰ニ於テ三院同シク辞シテ云夫貧道等ノ如キハ兼テ莫大ノ寺領ヲ費シ國恩ヲ受ル事分ニ過タリ今タマタマ萬部ノ法筵ニ連ナル事誠ニ是生来ノ本懐ト云ベシ何ソヤ今此重キ施物ヲ受ンヤト固ク辞スル事再三是ニ依テ導師及ヒ三僧ノ施物青銅各五百疋衆僧ニハ人毎ニ一千疋宛ゾ行ハレタリ（其時百疋ノ價銀七拾匁百疋ハ銭壱貫文ナリ）
萬部ノ供養事終リ經文ヲシテ城ノ鬼門ニ奉納ス今ノ萬部嶋是ナリ家長堀江兵庫助野田兵部亟万部修行ノ奉行タリ爰ニ於テ金公徳政ヲ行フ
今年秋冬長信公水江ニ於テ御誕生直茂公本庄ニ於テ御誕生アリ
同八年己亥（一五三九）　剛忠公御年八十六歳
夏四月二十八日大抵ノ城主小田駿河入道覺泓水江ヲ伐ントテ木原村ニ寄来ル水江ヨリハ家純公ヲ大将トシテ周家公純家公及家臣福地右衛門尉家盈等精兵數百是ニ從フ両軍相接シテ死創若干ナリ戰半ナルニ鍋嶋清久父子本庄ヨリ馳来リテ横鎗ヲ入ル爰ニ於テ覺泓カ先勢忽チ敗ル周家公純家公及ヒ家盈等競ヒ戰テ首數級ヲ得タリ覺泓大抵ヘ引退ク我公逃ルヲ追テ賀輿丁ノ橋ニ到ル敵兵江ニ落入リ溺レ死スルモノ甚多シ我軍凱歌ヲ揚テ水江ニ歸ル
秋八月三日本城ノ龍造寺大和守胤久公卒セラル泰長院殿長雲久公是ナリ
傳ニ曰正公ノ世嗣隠岐守家和公享禄三年七月ニ卒ス法名麟翁瑞公其嫡男ヲ刑部太輔胤和ト云（慶闇夫人ノ御父）先キダツテ卒ス胤久胤和ノ弟瑞公ノ次男ナリ初メ僧ト成テ寶琳院ニ住ス剛忠公及ヒ一族ノ請ニヨリテ還俗ス兄胤和ノ後室ニ配シテ家和ノ嗣タリ金公御後見也
胤久ノ長子新次郎胤光（後胤榮ト改ム）年十五ニシテ家ヲ嗣ク金公水江ヨリ萬事ヲ御差引アリ家門ノ息女ヲ以テ胤光ノ室トス一族伯耆守盛家右京亮胤直播磨守家親及納冨越中守家季土橋加賀守和貞小河筑後守久安等家政ヲ執行フ胤光相傳ノ所領凡二千町余ナリ後宮内大輔ト号シ天文十六年豊前守ト改ム金公ノ猶子ニシテ龍造寺ノ正統ナリ
同十年辛丑（一五四一）　剛忠公御年八十八歳
小貳冬尚（初松法師屋形ト称ス又ノ名ハ時尚運池ニ在リ）忍テ水江ニ来リ剛忠公ニ對面シ小貳家ノ衰微ヲ嘆キ哀レ龍家ノ武威ヲ假リテ再興アランコトヲ乞ハル金公小貳家ニ對シ忠貞ノ御心止マサルニヨリ異義ナク領掌シ玉フ爰ニ於テ一族縁者拾九人ノ城持ヲ語ラヒ又馬場筑紫高木神代江上横岳千葉松浦等ノ輩牒シ合セテ冬尚ヲ盛福寺ノ城ニ入ラシム和泉守家門公ヲ以テ後見トス千葉介胤頼ハ冬尚ノ近戚ナレバ小城ニ起テ遙ニ相援フ
同十三年甲辰（一五四四）　剛忠公御年九十一歳
亢龍悔アリ盈レハ欠ルノ理宜ナル哉竜家威勢日ヲ追テ盛ナリシガハ昨日ハ肩ヲ並ベシモ今日ハ下風ニ随ヒ腰ヲ折リ膝ヲ屈テ從ハスト云事ナシ爰ニ馬場肥前守頼周ト云モノアリ小貳ノ氏族ニシテ綾部中野ノ両城ヲ守リ三根郡ニ於テ數縣ヲ領知セルモノナリ嫡子ヲ政員トテ家純公ノ御

寄贈図書

■三浦尚司先生　寄贈図書

①声に出して読む
「大學」素読教本

②こどもたちへ
積善と陰徳のすすめ

■福田　司先生　寄贈図書

③豊前幕末
傑人列伝

④湯地丈雄

⑤あっ、鳥

婿ナリ然ルニ周頼ハ勝レタルヲ妒ムノ習ヒ水江ノ御一族威勢盛ニシテ己カ上ニ立ル、事ヲ安カラヌ事ニ思ヒ潜ニ冬尚ニ讒言ヲ構ヘテ曰彼水江ノ一族屋形ニハ當家ニ忠貞ヲ盡ストコソ思ヒ玉フベケレトモ恣ニ己カ權威ヲ振ヒ自立ノ志ヲ挟メリ只今ノ内ニ討亡シ玉ハスンバ悔トモ及ブマシト言葉ヲ巧ニシテ讒シケレバ無謀ノ冬尚一議ニモ及ハス尤ナリト同シ玉フ是却テ小貳家馬場ト共ニ滅亡ニ及フノ基ヒナリトハ後ニソ思ヒ知ラレケリ

其後ハ小貳千葉馬場横岳神代有馬松浦等ノ輩密々ニ謀ヲ通シ専ラ竜造寺誅伐ノ術ニ及フト云々

小貳冬尚春夏ノ比竜造寺御一族ヲ頼ンテ多久松浦ノ輩ヲ伐シム是ハ父祖ノ怨敵タル故ナリ水江ヨリハ周家公ヲ大将トシテ一族郎従等ヲ率ヒ進テ多久城ヲ攻ム城主多久藤左衛門宗時忽チ利ヲ失ヒ南ノ方有馬ニ奔ル周家代テ城ヲ守ル多久ノ地士相浦土橋等ノ輩来リ從フ者多シ是我祖ノ多久ニ入ルノ始メナリ

家系事蹟　冬尚千葉竜造寺ニ命シテ西肥前ヲ退治セシム先多久ノ城ヲ攻取ル周家是ヲ守ルト

冬十一月千葉介胤勝軍ヲ率ヒテ松浦黨ヲ伐龍造寺盛家

高木鑑房（盛家ノ子）

父子一族數百人先陣タリ二十二日大河野ノ城ヲ責ム進テ田代村ヲ越ヘ城下ニ到ル城主鶴田直ハ此日家臣等ヲ集メ酒宴ヲナス酒酣ニシテ猿楽ヲ催シ時ヲ移ス敵ノ襲ヒ来ラントハ梦ニモシラザリシカ忽チ城外ノ鯨波ノ聲ヲ聞テ流石ノ鶴田少シモ騒カス直ニ突出ニ防キ戦フ其勢ヒ甚烈ク龍家ノ軍敗レテ桑原ニ退ク鶴田勝ニ乗テ頻リニ追撃龍造寺三郎四郎満家（盛家ノ子鑑房ノ兄）同隠岐守家久（左近将監胤門ノ子平尾ノ祖）以下討ル、者數多ナリ盛家疵ヲ蒙テ引退ク鑑房ハ平山楠村ヲ越ヘ五山ヲ過テ小城山ニ逃ル道ニテ馬斃レ素足ニテ漸高木ノ館ニ歸ル既ニシテ松浦黨両鶴田先陣シテ多久表ニ出張シ獅子城ニ楯籠ル其上有馬越前守義貞高木ヲ進発シテ藤津杵嶋ニ出張ス是馬場頼周カ謀　計ニヨル所ナリトソ

同十四年乙巳（一五四五）　剛忠公御年九十二歳

春正月有馬勢宗時ヲ先陣トシテ多久ニ到ル竜造寺ノ御一族數百人志久峠ニ出テ防キ戦フ味方軍敗レ竜造寺新五郎胤明（胤久ノ子胤榮ノ弟）右京亮胤直於保備前守胤宗及ヒ副嶋右馬助同五郎左衛門尉成冨式部少輔ヲ始メ數人討死ス有馬勢勝ニ乗テ攻来ル松浦勢ト兵ヲ合セ城下水ノ手ニ押寄ル周家公稠敷下知ヲ加ヘ四方ヲ固メ力ヲ盡シ防キ戦フ事三日ニ及フ家臣蒲原上総介木下十郎岩松孫三郎ガ輩或ハ強弓ヲ放チ或ハ長戟ヲ振ヒ烈敷防戦シテ敵ヲ退ク岩松以下死創モ亦多シ

此時與賀阿弥陀院ノ住僧周家公ニ御見舞シテ城中ニ来懸リシガカヽル危急ノ場ニ出逢コソ生来ノ面目ナリト大城戸ニ駆出テ手痛ク働キ終ニ其場ニ討死ス

有馬勢兵ヲマトメテ女山ニ陣ス舟山日鼓ノ山々軍勢ナラサル處ナク篝火幾百千ト云ヲ知ラス城中ハ甚微勢ニシテ此敵強ニ當リ難ク終ニ夜ニ紛レテ城ヲ出テ竜造寺ニ歸ル有馬氏多久城ヲ取リ宗時ヲシテ又爰ニ居ラシム世ニ多久崩レト唱フ此時ノ事ナリトソ扨有馬勢機ニ乗テ進テ佐嘉ニ迫ル千葉神代高木馬場頼周ヲ魁首トシテ數萬ノ軍勢四方ヨリ水江ノ城ヲ取囲ム竜家ノ御一族持口々々ヲ固メ防キ戦フ事數日ニ及ブ特ニ頼周千布宗利ト共ニ来リ金公ニ對シテ申上ケルハ御身讒言者ノ妨ニヨリテ屋形ノ御憤リ尤甚ク今此城ヲ守リ強ク防キ玉ハバ恐ラクハ不忠ノ名ヲ蒙リ玉ハン一先速カニ城ヲ御啓キアツテ後日罪ナキヨシヲ申啓カレナバヨモ宥免無キ事ハアラジ其時コソ此頼周程能執成申ベシト勧メ奉リシカバ家純公家門公ハ此義ニ任セラレ然ルベシト同シ玉ヘトモ金公純家公ハムザト其義ニ随ヒ玉ハズ純家ノ云夫當家ニ於テ屋形ニ對シ忠有テ不義ナシ縦令佞者アリテ讒言ヲ構ユルトモ容易ク是ヲ聞入玉ハンヤ我察スル所是頼周我一族ヲ詠シ出シ當家ヲ亡サントノ結構ナル事疑ナシ努々城ヲ啓事然ルベカラス指當リ此傷ニテ頼周ヲ討果シ其後分明ニ申啓キ有テ然ルベシト申サレシカ共金公如何思召ケン此義ヲ許シ玉ハス終ニ頼周カ勧メニ従ヒ玉フ爰ニ於テ諸軍囲ミヲ解ク家純公家門公父子兄弟六人一同ニ城ヲ出ラル時ニ頼周カ使来リテ告テ云御邊等何方ニ御出候トモ御一同ニテハ然ルベカラス最早御下城ノ上ハ頼周ヨキニ御計ラヒ申ベシ周家公家泰公方ニハ人質トシテ城原ニ御越シアルベシ其余ノ方々ハ何方ニモ御啓キアレカシト誠シヤカニ申入レシカバ此上ハ兎モ角モ御差圖ニ任スベシト二十三日豊後守家純公和泉守家門公孫三郎純家公ハ筑前ヘト志シ三瀬越ニソ赴キ玉フ六郎次郎周家公孫八郎頼純公三郎家泰公ノ御方々ハ城原ニ赴キ金公ハ幼弱ノ人々ヲ具シテ南ノ方海ヲコヘテ筑後ニソ啓カセ玉フ扨家純家門純家三公漸々河上迄到リ玉ヘバ日已ニ暮ニ及フ然ルニ頼周ハ逞兵數百ヲ引率シ御跡ヲ追テ馳付タリ神代勝利ハ御行向ヲ遮ント山内ヨリ押降リ前後一時ニ出合テ俄ニ鯨波ヲ発シ三将ヲヒシビシト取囲ミアマサシト打テカヽル三将ハ是ヲ見テ扨ハ頼周ニ欺カレタリ臍ヲカムトモ益ナシイザ切死セント家純公家門公ハ河東ノ岸上ニ立テ頼周ニ當リ純家公主従ハ河西ノ社頭ニ在テ神代ヲ防キ玉フ三将ハ今ヲ最期ノ戦ヒ

ナレバ憤然トシテ勇氣烈ク馬場神代カ兵トモ若干討レ疵ヲ被ルモ数ヲ知ラスサレトモ味方ハ纔ノ少勢ニテ敵ノ大勢ニ蒐合テ数刻ノ血戰ナレバ終ニ勞レテ家臣堀江大膳片田江七郎兵衛同五郎太郎同新次郎新郷伊豫守以下ノ十余人烈敷戰テ眼ノ前ニ討死ス頼周勝ニ乗テ短兵急ニ打テカヽル二公今ハ是迄ナリトヒシト進テ枕ヲ並ヘテ御戰死アル頼周ノ臣吉田吉冨其首ヲ獲タリ馬場勢既ニ凱歌ヲ揚ク純家公ハ社ノ邊ニテ神代ト渡リ合テ血戰ス此将天性大勇力有テ殊ニ打物ノ達人ナリシカバ純家公一人シテ数百ノ神代勢ヲ七回迄ゾ打崩サル誠ニ一騎當千トハ此人ヲヤ云ヘキ討取首数ヲ知ラス御身モ亦創ナラザル所モナク既ニ敵ヲ退ケシヅシヅト社頭ニ回テ暫ク息ヲ継レシカ自ラ右ノ指齧切リ血ヲ以テ寶殿ノ扉ニ山遠雲埋行客跡夜寒風破旅人梦一聯ノ古詩ヲ書レタリカヽル所ニ神代ノ臣久保大學ト云モノ馳来リ各名乗カケテムンズト組ム純家公数刻ノ戰ニ力勞レ終ニ大學ニ組伏セラル組レナカラ短刀ヲ以テ上サマニ二突三突ツカレシカ大學ハ突レナカラ頸ヲ搔キ其身モ其儘純家ノ屍ニ打重リテ卧タリケル大學従者馳来リ板戸ヲ放シ大學ヲノセテ河ヲ渡リシカ中流ニシテ終ニ死ス馬場神代ハ大ニ勝利ヲ得テ三将及家臣等ノ首ヲ級櫃ニ入レ城原ヘト赴キケリ時ニ二十三日ノ曙ナリ三将ノ墓河上河東ノ岸上ニ有テ六地藏ヲ験トス（**今ノ都渡岐ノ宿ノ北東ナリ**）是即チ戰場ナリトゾ周家公以下ノ御方々ハ河上ニテカヽ變アラントハ梦ニモ知ラス其夜ハ和泉村玉泉坊ニ一宿シ翌二十四日朝都渡岐ノ宿ヲ出テ城原ニ赴ント祇園原ニカヽリ玉フ折節数百ノ兵藪ノ陰ヨリ顯レ出テ不意ニ打テ懸ル是馬場カ家老藥王寺隼人助等ナリ戰ヒ未半ナラサルニ頼周勝利河上ヨリ来リ一時ニ出會三将ヲ取囲テ我討取ント責戰フ固ヨリ多勢ト云ヒ勝誇タル敵兵ナレバ其勢烈敷シテ中々當リ難シ周家家泰頼純今ハ最期ト力戰シテ死ス（**周家年三十三其余詳ナラス**）家臣ノ死ニ殉スルモノ十五人福地卯右衛尉同新右衛尉同善八郎百武藤次左衛門尉平大炊助江副又次郎西山小三郎下村源八同犬房丸野田謙書記石井左衛門犬塚彦兵衛尉同市佑野田河内守同越前守

一説ニ野田河内同越前ハ金公ノ使トシテ来リシニ周家公以下悉ク討レ玉ヒシト聞ヨリ怒リニ堪ス馬ヲ馳テ馬場ヲ追懸敵数人ヲ討取リ二人モ共ニ討死スト云々

一説ニ馬場頼周金公ニ謂テ曰屋形翁ノ一族西征ニ從ハザルヲ怒テ誅伐ヲ加ヘラル然レトモ我レ翁ノ異心ナキヲ知ル城ヲ避ケ罪ナキヲ訴ヘラレナバ必免許セラレン然レトモ親族集リ居テハ愁訴ノ詮ナシ翁ハ筑後ニ蟄居シ家門ハ筑前ニ赴クベシ自餘ノ子孫ハ我能ク屋形ニ訴ヘ宥恕セシムベシト云翁是ニ迷フ頼周又使ヲ以テ云我屋形ニ請フテ三子許サレタリ周家家泰頼純ハ早ク屋形ニ到テ是ヲ謝スベシ家純家門純家ハ筑前ニ行ベシ後日ノ免宥疎略アルベカラスト云

郎従數百人早田勘解由等力戰シテ死シ三子社内ニ自殺ス鍋嶋清久翁ノ馬場カ詞ニ從フヲ聞テ野田越前ヲ使トシテ是ヲ諫ム翁聞カス三子城原ニ赴清久曰我老タリ城ニ走ル能ハス翁ノ淳直他ノ賊意ヲ知ラス後悔何ソ及ハン越前ヲシテ三子ノ行ヲ留メシム祇園原ノ伏兵起ルニ逢フ越前數人ヲ斬却シテ死ヲ致スト

馬場神代ハ家純公以下ノ御首級ヲ取持セ直ニ盛福寺ノ城ニ到リ小貳屋形ノ實検ニ備ヘケリ頼周思フ様多年彼等カ為ニ威勢ヲ奪ハレ頭ヲ低レ膝ヲ屈メシ遺恨殘カサ

私の好きな論語

多久市立東原庠舎
西渓校３年生
稲毛　琉聖さん

「過ちては則ち改むるに憚ることなかれ」

ぼくは、ウソをつくから、今度からウソをつかないで、正直にあやまろうと思いました。大人になって、ウソをついてはずかしい思いをしないためにこの論語をえらびました。

多久市立東原庠舎
西渓校６年生
花岡　　和さん

「疑わしきには問を思う」

私は、勉強がにがてでこの意味のように分からない時は先生や友達に質問して、少しずつ分からないところをなくしたいからです。

私は将来の夢は変わると思うけど（今は保育士です。）子どもたちに分かるように教えてあげたいです。

リシニ今度ヤスヤスト彼等ヲ討捕不日ニ本懐ヲ達シタリト悦ブ事限リナシ夫ヨリ六人ノ首ヲ城門ニ埋メ出入ノ人ヲシテ踏マシム其悪行ノ甚シキ見ル人憎マヌモノハナカリケリサレバ和泉ニハ也足菴ノ住僧椿叔ト云人竜造寺ノ御一族祇園原ニ於テアヘナク討レ玉ヒ其死骸ダニ誰レ取収ムルモノモナク野原ニ散乱セル由ヲ聞テ寺僧人夫ヲ連レ来リ主従ノ屍ヲ取集メテ一所ニ葬リケリ

周家以下ノ死骸ヲ埋メシ塚祇園原ニアリ後年慶闇尼公隆信公長信公ト御相談家純公周家公純家公ノ塔ヲ圓藏院ニ建テ槙ノ内ノ免田ヲ寄附シテ茶湯ノ料トス又竜造寺鑑兼家門家泰父子ノ塔ヲ乾亨院ニ建ツ其後國家ト水江ト周家公以下ノ牌ヲ也足菴ニ安ス周家公ヲ謚シテ鼎伯周公ト云

竜造寺胤榮膚受ノ災ヲ慮リ潜ニ防州ニ到リ小貳ノ横逆ヲ訴フ義隆上聴ニ違シ小貳追討ノ事ヲ許ス

二月頼周軍兵ヲ引テ小城ニ到リ祇園山ノ古城ヲ改メ築ク但小貳冬尚ヲ此城ニ居ヘ自ラ盛福寺ニ居城センカ為ナリトソ扨モ剛忠公筑後國一ツ木村ニ御蟄居アリテ頼周カ暴悪ニ因テ御子孫悉クアヘナキ最期ヲ遂サセ玉ヒシ事ヲ御聞アツテ甚怒リ哀ミ玉ヒ我百日ノ間ニ此怨ヲ報セスンバ死シテモ忘レスト寢食ヲ安ンセス晝夜心肝ヲ碎キ玉フ

馬場頼周小城ニ出張シ千葉胤頼ト力ヲ合セ胤勝ヲ追フ

胤勝城ヲ渡シテ多久ニ潜ム（胤頼ハ冬尚ノ弟）

佐嘉ニハ鍋嶋清久父子及ヒ鹿江遠江守内田美作守太田美濃守南里ノ一族石井ノ一黨副嶋村岡古閑御厨久米徳久金持飯盛田中右衛門太夫西岡因幡守一味同心シテ金公ヲ迎ン事ヲ謀ル小城ニハ千葉胤連ヲ始メトシテ鴨打陸奥守及空閑持永平林橋本彌藤司雀田西持院江原塚原古賀満岡野田堤等ノ郡士各一味連判シ使ヲ遣シテ金公ヲ招ク扨申贈ルニハ頼周父子近頃小城表ヘ出張シ城ノ普請最中ナリ幸ヒノ機會ニ候間急キ御歸國有テ御旗揚アラバ頼周父子ヲ討取ン事掌ノ中ニアリト申遣シ兵船ヲ出シテ是ヲ迎フ金公大ニ悦ヒ玉ヒ直ニ船ヲ発シテ鰐江ニ着岸シ無量寺ヲ本陣トセラル鍋嶋清房鹿江南里内田大田及ヒ與賀川副ノ郷士等来リ迎ルモノ一千余人金公ヲ守護シテ水江ニ入奉ル時ニ三月下旬ナリ夏四月二日剛忠公千葉胤連等ト謀リテ河上ニ出陣ス時ニ小城ノ郡士一千計リ不意ニ起テ祇園山ノ城ヲ襲ヒ短兵急ニ是ヲ攻ム城兵忽チ敗レ影モナク逃去タリ頼周父子單騎ニシテ城ヲ出テ城原ニ奔ントテ河上ニ到レハ竜家ノ先鋒都渡城ヨリ河東ニ遮リ矢ヲ放ツ事雨ノ如シ政員カ馬矢ニアタリ河ヲ渡ルコトヲ得スシテ西岸ニサマヨヒシ處ヲ小城一揆ノ首長野田三河駈来テ是ヲ伐チ政員ノ首ヲ得タリ頼周アル寺院ニ逃入芋ガマノ中ニ隠レシヲ加茂弾正ト云フモノ捜出シテ首ヲ取ル

一説ニ頼周ハ河上ニテ陣内氏討捕トモ又野田氏是ヲ打トモ詳ラス

剛忠公高木ノ三本松（坪ノ上ニアリ）ニ於テ先政員ノ首ヲ御實検アリ馬ヨリ下リ座シテ是ヲ見ル金公愀然トシテ泪ヲ押ヘテ曰ク吾子政員我孫婿ナラスヤ我本ヨリ吾子ニ對シテ何ノ怨ミカアル何ソ討ラン今日吾子ノ首ヲ實検セントハ是只汝カ父頼周カ仕業ナリ天罰道レガタシ頓テ頼周ノ首ヲ見ン事疑ナシト云言葉未終ラサルニ頼周カ首ヲ持シ来テ實検ニ入ル金公是ヲ見テ曰汝何ノ怨ミ有テ罪ナキ我若干ノ子孫ヲ殺セシゾヤ誠ニ無慙ノ次第ナリ我恨ミテモ猶餘リアリ暴悪ノ甚シキ天罰早クモ其身ニ歸ス人ヲ恨ル事ナカレ野田兵部進テ曰ク彼大悪人ノ頼周公達方ノ御首ヲ盛福寺ノ城門ニ埋メ出入ノ者ニ踏マセシト兼ル今頼周父子カ首ヲ水江ノ城門ニ埋メテ衆人ノ土足ニ懸ケ怨ヲ報セント云金公聞スシテ曰ク諺ニモ仇ハ恩ヲ以テ報ストイヘリ頼周假今不義ヲ行フトモ我爭テカ是ヲ效ハンヤ且政員事ハ一旦我婿トナリシモノナレバ其死ヲコソ哀シムベシト父子ノ首ヲ高城寺ニ送リ懇ニ吊ハシム嗚呼頼周悪行ヲ恣ニセシカ人ヲ祇園原ニ滅シ我又祇園岳ニ亡ビ人ヲ河上ニ殺シテ其身モ又河上ニ誅セラル天罰ノ免レ難キ目前ニシテ懼ルベシ懼ルベシ扨モ金公ハ御存念ノ通リ百日ノ内ニ御子孫ノ仇ヲ報ヒ家純公家門公以下ノ霊魂ヲ黄泉ノ下ニ散セラレ悦ヒ勇テ水江ニソ歸リ玉フ

此月金公胤榮ト一同ニ使者ヲ大内義隆ニ遣シ舊好ヲ修ム時胤榮ヲ宮内太輔ト号ス本ノ如ク竜造寺ニ復ル（或曰此時胤榮ハ筑前ニ有ト又一説ニ訴ノ為山口ニ行クト）

同十六日金公兵ヲ出シテ神代勝利カ千布ノ砦ヲ夜討シ忽是ヲ破ル勝利敗レテ山内ニ退ク此時佐嘉ノ士中嶋主水戰死ス金公仇ヲ遠方ニ追退ケ先ハ安堵ノ思ヲナス是ニ因テ家純公以下ノ妻子金公ヲ頼ンテ皆々舊宅ニ歸住サル金公孫九郎鑑兼（家門ノ次男）ヲシテ家門ノ遺跡ヲ相續セシム又周家公ノ御子長信公ヲ立テ家純公ノ御遺跡ヲ嗣カシム長信公今年九歳慶法師君ト申奉ル其采地鹿子末次袋槙木原竹藤南里新郷是ヲ并セテ西分ト稱シ中舘ニ属ス爰ニ於テ長信公御祖母玉洞尼公（家純ノ御室）ノ讓リヲ受テ家純公ノ御遺跡中舘ノ主タリ石井鷲崎村山西岡木下吉岡福地古閑江副等是ヲ補ク又鍋嶋清房ノ子太郎五郎（後下総守康房ト号ス又信種）ヲ以テ純家ノ家督トシ西舘ヲ嗣カシム是又金公ノ外孫ナリ

同十五年丙午（一五四六）　剛忠公御年九十三歳

春正月竜造寺胤榮國ヲ出テ中國ニ赴ク是ハ高木鑑房（鑑房ハ實ハ竜造寺盛宗ノ子高木ノ家督東高木トイフ）カ造意ニ依テナリ中國ノ管領義隆是ヲ容レテ懇情ヲ加フ是金公忠功ノ故ナリ金公寶琳院ノ中將君ヲ勸メテ還俗セシム（中將君ハ或ハ中納言ニ作ル）是周家公ノ長子ニシテ金公ノ嫡曾孫水江ノ正統ナリ曾テ寶琳院ニ入テ豪覺法印（豪覺ハ周家公ノ弟中將君ノ叔）ノ弟子ト成天性敏ニシテ其心濶如タリ金公御深慮有テ還俗セシムト云々中將君宝琳院ヨリ来テ石井藤兵衛尉忠房カ家ニ入ル水江ノ老臣等来リテ金公思召ノ旨ヲ傳ヘ強テ法衣ヲ脱カシム今年十八歳此時民部太輔隆胤ト号ス後ノ山城守隆信公ト稱シ奉ルハ此御方ナリ御髪長スルマデノ所ハ忠房カ宅ニ滞留サル

一説ニ中將君ノ還俗ハ金公逝去ノ後ナリ金公在世ノ内中將還俗ノ事ヲ遺言アリシトナリ

家系事蹟　金公遺命云中納言ハ倜儻ニシテ物ニ屈セス還俗シテ武功ヲ励ムベシ先ニ家純カ一跡ヲ慶法師ニ附ス然レトモ改メテ澄家カ跡トス中納言純家カ跡水江西分ヲ領スベシ立身ノ後ハ是ヲ慶法師ニ讓ルベシ左衛門太夫鑑兼ニハ家門勲功ノ地ヲ給フ時ニ中納言十八歳還俗シテ民部太輔隆胤ト号ス

三月十日金公水江ノ舘ニ卒ス行年九十三慶雲院ニ葬ル

水江ノ第二世ナリ

水江三世和泉守家門法名春雲浄香ト申其事ハ金公ノ譜中ニ詳ナリ其長子三郎家泰モ父ト同時ニ戰死セリ家泰ノ弟孫九郎鑑兼金公ノ命ヲ以テ父兄ノ跡ヲ相續ス然レトモ故有テ舘ヲ去リ世代ニ立ス長信公ヲ以テ正統トス水江家ニ於テ正月四日ヲ以テ禪院衆僧ノ禮日トス是金公ノ定メ玉フ所ナリ今水江衆中ノ僧毎年正月四日年禮ヲ多久家ニ遂ルハ此時ヨリノ旧禮ナリトソ

鎮西志　天文十五年正月十九日胤榮高木鑑房カ謀逆ニ依テ國ヲ出ツ其後太宰府ニ至リ府司ニ依テ大内義隆ヲ頼ム義隆伯父剛忠以来ノ旧好ヲ以テ是ヲ許ス義隆ノ書到ル

其文ニ云

至筑前上國之由可罷候本意不可回踵候猶隆満宗長可申也　恐々謹言

三月二日　義隆　判

龍造寺宮内太輔　殿

鎮西志　同十六年丁未竜造寺宮内太輔胤榮（年二十三）大内義隆ノ陣代ヲ許サレ少貳追討ノ使節ヲ蒙リ防州ヨリ下ル爰ニ於テ胤榮訴ヘテ云合戰功アルニ於テハ肥前國守護代ノ職ヲ胤榮ニ補セラレン事ヲ請フ原田隆種是ヲ執ス義隆是ヲ許シ則判状ヲ與フ

肥前國守護代官之事可申付候忠節肝要ニ候猶原田可被申候　恐々謹言

三月廿七日　義隆　判

龍造寺宮内太輔殿

第2回 多久百景写真コンテストのご案内

あなたの写真が多久百景に！
（毎年二十景・５年間で百景を認定します）

テーマ　多久の四季・伝統文化・歴史
応募期間　2018年５月１日～７月31日
応募料　無料
応募条件　多久市内で撮られた写真に限定

詳しくは当財団HPをご覧いただくか、下記へお問い合わせ下さい。

問い合わせ先　公益財団法人 孔子の里
「多久百景 写真コンテスト」係
電話 0952-75-5112

孔子の里　検索

◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。
ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

- **会員の種類**
  個人賛助会員　年会費　一口　３，０００円
  法人賛助会員　年会費　一口　１０，０００円
- **入会申込み・お問い合わせ**
  〒846-0031　多久市多久町1843番地３　東原庠舎内
  公益財団法人 孔子の里 事務局
  電話　0952-75-5112　FAX　0952-75-5320
  E-mail　ko-si@po.taku.ne.jp　孔子の里　検索
  詳細は当財団ホームページをご覧下さい。

肥前国多久邑八景詩紹介（其の参）

古城白雲

樓門跡旧址基存
玉葉金枝擁石根
寂寞古城寒樹老
白雲千歳與誰言

樓門趾旧ク址基存シ
玉葉金枝石根ヲ擁ス
寂寞タル古城ハ寒樹老イ
白雲千歳誰トトモニカ言ハン

諸官快堂　林信允士僖甫

古城白雲

含悽望古城
一半白雲深
倚劔人何処
月明夜々心

悽ヲ含ンデ古城ヲ望メバ
一半白雲深シ
劔ニ倚ルノ人何処ンゾ
月明ク夜々ノ心

経筵講官　林信智艸

第二十三回 多久市論語カルタ大会入賞者

【幼稚園・保育園の部】
・優勝　吉田淳一郎（こばと保育園）
・準優勝　挽地　姫來（こばと保育園）
・三位　陣内愛梨紗（こばと保育園）

【小学一年生の部】
・優勝　山田　麻衣（東部校）
・準優勝　村川虎太郎（中央校）
・三位　広橋　夏李（東部校）

【小学二年生の部】
・優勝　北島　拓実（東部校）
・準優勝　吉田　凜音（中央校）
・三位　梶原　宏聖（西渓校）

【小学三年生の部】
・優勝　徳重　瓢（東部校）
・準優勝　山田　結衣（東部校）
・三位　野田　千裕（東部校）

【小学四年生の部】
・優勝　広橋　華恵（東部校）
・準優勝　中谷　侑樹（東部校）
・三位　陣内香菜子（西渓校）

【小学五年生の部】
・優勝　田代　渚咲（東部校）
・準優勝　中尾　円香（中央校）
・三位　野田　祐真（東部校）

【小学六年生の部】
・優勝　鈴田　美空（西渓校）
・準優勝　藤田　真央（西渓校）
・三位　荒島　陽菜（東部校）

【中学生の部】
・優勝　堤　彩花（西渓校）
・準優勝　山本　真愛（西渓校）
・三位　木村　恵女（西渓校）

【高校・一般の部】
・優勝　隅川　瞳
・準優勝　寶藏寺このみ
・三位　森田　真由

公益財団法人 孔子の里　販売物

◇論語　日めくりこよみ
７００円

◇百人一首式論語カルタ
２，５００円

問い合わせ先
公益財団法人 孔子の里　　電話　0952-75-5112
当財団HPもしくはAmazonでも販売しています。
百人一首式論語カルタ　検索

《儒林》

多久では先覚者・先賢を儒林と呼んでいる

石井鶴山（一七四四～一七九〇年）

延享元年（一七四四）、多久領御構内で石井十郎太夫忠貫の次男として生まれた。姓藤原、諱忠鎮・式猶、自称有助、字は仲車、号は鶴山。

佐賀石井家は、龍造寺氏や鍋嶋氏と姻戚関係を持ち、石井党、石井一門と呼ばれる佐賀を代表する武門の家柄で、龍造寺家兼の曾孫婿となる尾張守兼清（石井五男家の祖）の家系。兼清の子大隅守周信、勘解由理俊親子が龍造寺長信の多久入城に従って多久へ移り住む。

鶴山の父の忠貫も俊才で東原庠舎の訓導・監察を経て水ヶ江多久屋敷の監となり郷学の教授となった事が「石井系譜」に見ることができる。

幼い時から父の教えを受け郷校東原庠舎で学び、十七歳で都講（教諭格）と成り、桐野山妙覚寺の智雲和尚、黄檗の詩僧大潮に詩を学び、京都に遊学し、荻生徂徠の高弟高葛波に師事して、学問稽古の為上方並関東筋巡歴し、江戸では幕府役人の太田南畝（蜀山人）、米沢藩藩主上杉鷹山の藩政改革を学問上で指導した細井平洲、広島藩の儒者頼千秋、熊本藩藩校時習館教授籔弧山、薩摩藩の侍讀赤崎彦礼、久留米藩の儒者樺島石梁、など碩学鴻儒と交わり名声は高まり、それを聞いた佐嘉藩八代藩主鍋嶋治茂は、安永三年（一七七四）十二月二十八日、鶴山を江戸桜田藩邸に呼び「魯論」を講じさせている。そして翌四年一月十五日、拾人扶持で召抱え東都留学を命じ、此後毎晩、御前に召し出され講釈を仰せつけられている。

各地で藩政改革を見聞していた鶴山は『藩政改革成功の秘訣は人材の育成にあり』と進言し藩校弘道館の開設のきっかけをつくったと云われる。

天明元年（一七八一）九月二日、松原小路相良十郎元屋敷に文武稽古場がつくられる事になる。同年十二月二十二日、鶴山は肥後・薩摩両国は学校を建てられ篤学の人も多く、諸国の学校の制度、士民の風俗、政道の得失を視察する為に四十日間の暇願いを申し出ている。

藩主治茂はその後も鶴山を重用し、参勤の際は必ず随行させている。

墓表によれば「己酉の秋、治茂公は参勤され、先生も従われた。春になり帰国しようとした矢先、病に罹られた。病をおして五瀬の行に従われたが、摂津に至り、また従う事ができず館に留まられたが、二十日程で亡くなった。実に寛政二年四月九日であった。摂津西成郡曾根崎村久昌寺の地に葬られた。」

この時の参勤の記録を見れば、「寛政二年二月二十七日、江戸を発。途中、伊勢太神宮参詣の為三月十一日、津（三重県津市）に着。十三日、両宮参詣、その後二見浦を参詣。十四日、山田を発ち、松坂で休憩、津に宿。十五日、土山（滋賀県甲賀市）に宿。十七日、伏見着。十九日伏見を発ち郡山（大阪府茨木市）に宿。」

鶴山も病をおして伊勢の内宮、外宮に参詣し、二見ケ浦の夫婦岩を見て、滋賀県甲賀市土山町にある五瀬（文徳天皇の第一皇子惟喬親王が第四皇子惟仁親王（のちの清和天皇）の出生で皇太子につけずに隠棲した御所の跡）で、その悲運の生涯を偲び、十九日に大阪府茨木市で治茂一行と別れたと思われるがその記録は残っていない。凡そ二十日で亡くなり曾根崎の久昌寺に葬られる。

久昌寺は明治三十八年、北新地の開発の際に大正区へと移転している。墓表面が剥がれ落ちているが、碑文の撰は古賀精里、書は武冨孝述を確認する事が出来る。佐賀市の天祐寺には髪墓が祀られている。

（服部）

▲髪墓（天祐寺）

▲墓表（久昌寺）

▲墓（久昌寺）

【参考文献】
『石井系譜・五男家』（佐賀県立図書館所蔵）
『佐賀県近世資料』第一遍第八巻（佐賀県立図書館）
『近代碑文集』第廿五（佐嘉文学鶴山石井先生墓表）
『名儒石井鶴山』大園隆二郎講演資料（2017年）

来訪・来信・雑録

10月2日　多久聖廟春季釈菜委員会
10月3日　古文書講座（多久古文書の村・片倉日龍雄）
10月7日　「鶴山塾」『多久の歴史と文化とその背景』
（公益財団法人孔子の里評議員・西村隆司）
10月9日　安岡定子先生来廟
10月11日　多久聖廟及び周辺のボランティア清掃
（株式会社九電工佐賀支店）
10月22日　平成二十九年度多久聖廟秋季釈菜・孔子祭
第一回多久百景写真コンテスト表彰式
10月28日　佩川の『婆心帳をよむ』講座
（佩川の会副会長・尾形恵子）
10月29日　「鶴山塾」『肥前狛犬を石工職人と作ろう①』
（古賀石材店　店主　古賀正幸）
11月4日　石楠花植栽七株
11月7日　古文書講座
11月9日　「鶴山塾」『肥前狛犬を石工職人と作ろう②』
11月11日　佐賀県退職校長会、来廟・来舎
「鶴山塾」
『草場佩川～漢詩人としての人となり～』
（福岡県漢詩連盟会長・三浦尚司）
11月12日　「鶴山塾」『肥前狛犬を石工職人と作ろう③』
11月14日　石井鶴山墓碑調査（大阪府）
11月18日　楷樹植栽六株
11月23日　第二十三回論語カルタ大会
（於：東原庠舎西渓校）
11月24日　京都大学附属桃山中学校大栗真佐美先生、論語教育研究のため来舎
11月25日　佩川の『婆心帳をよむ』講座
11月26日　『多久家文書を読みなおす②』
東京大学史料編纂所主催
12月2日　第二十回「全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式・公開講座」
公益財団法人斯文会会長・石川忠久先生来舎
12月5日　古文書講座
12月16日　「鶴山塾」『君子として生きる～草場佩川は書画に何を映したか～』（佐賀県立佐賀城本丸歴史館副館長・古川英文）
12月23日　佩川の『婆心帳をよむ』講座
1月13日　日本自動ドア㈱吉原二郎社長他三名来廟・来舎
1月16日　古文書講座
1月28日　佩川の『婆心帳をよむ』講座
2月6日　古文書講座
2月24日　佩川の『婆心帳をよむ』講座
3月10日　ジュニアガイドと博愛少年団（佐賀市・佐野常民記念館）との交流会

「大友氏ゆかりの地を訪ねる旅」として、大分の大友氏顕彰会からの一泊ツアーで訪れました。バスを降りて急いでおりますとジュニアガイドの皆様に取り囲まれて慌てました。僅か三十分という予定時間でしたが、ピチピチのお嬢様方のご案内に、私共二十名のおじさん・おばさんは楽しく充実したひと時でした。初めての仲間も居たのですが予期せぬ出会いは幸先のよい旅の始まりでした。

私は多久聖廟、三度目。最初はウォーキングイベントで「佐賀ひとめぐり」、二度目は、NHK大分文化センター「神と仏を巡る多久聖廟と武雄神社を訪ねて」。この時は、「全国ふるさと漢詩コンテスト」平成二十六年度最優秀賞・阿部清澄さん（職場の友人）の石碑を探して東原庠舎を訪れました。これからも漢詩文化の為にもご繁栄を祈っております。（大分市、小野美佐子）

生まれ育った故郷を離れて五十年が過ぎました。今回、南部小学校・中学校の同窓会で、聖廟の釈菜を見学させていただきました。小学校の遠足やスケッチ大会で山越えをして行った懐かしい思い出がよみがえってきました。重要文化財に指定されている多久聖廟は、多久を故郷に持つ者の誇りです。この歴史的行事がいつまでも続くことを願ってやみません。（福岡市、冬野　徹）

聖廟の森に棲む動物たち

ヤマガラ

里山の鳥の代表種といっていい。色がいい。体のデザインもいい。動作も可愛い。それが一年中いて庭先にやってくるからたのしい。

以前、市の主催で巣箱づくりをしたことがあった。時期的には巣箱をかけるのは遅かったが、ヤマガラはすぐ巣箱を利用してくれた。なんだか人なつこい鳥のようである。

地鳴きはニーニーとかチーチーとかに聞こえる声で、囀りはツツビーツツ、ツツビーツツと鳴き、テンポはゆっくりしている。

冬季にピーナツやヒマワリの種をエサ台に置くとやって来て食べてくれる。脚で押さえてくちばしでつつく様子はなかなか見飽きない。

（日本野鳥の会　福田　司）

▲ヤマガラ（下鶴にて）

編集後記

今年の冬は殊更厳寒の日々が続いたように思えた。しかし聖廟の森の辺りを見渡してみればいつの間にか藪椿があちらこちらに真紅の花びらを咲かしている。寒かった雪の日々も木々たちは春に備えて準備をしていたのだと自然の力強さに気付かされる。

四十数年前、北多久町小侍の松の塔で古墓石群を見つけ、古戦場の跡ではと思い、『北肥戦誌』の記録を調べに、旧多久村立図書館を訪ねた。大正時代に高取伊好氏が寄贈された洋風二階建ての瀟洒な建物は多久の文化の象徴のような存在であった。そこで司書として勤務されている細川章さんにお目にかかって『水江事略』を紹介していただいた。

再び多久へ帰ってきて、今度こそ多久の歴史を学ぼうと、この本を読むことに決めた。しかし僅か百年程までは使われていた日本語が読めない、理解ができない。

多久の歴史事典のような存在だった細川さんが逝かれて四年が経つ。浅学の私には、文書への理解も又記載された時代背景や語彙についての知識も不十分で、誤記、脱字、誤訳など多々あると思われる。皆様のご指摘、ご指導をお願いします。（服）